

## 2 実践

# 平安京にタイムトラベルして、描かれた世界を捉えよう

京都教育大学附属桃山中学校教諭 神崎友子

## 1 はじめに

本校は秀吉の城下町、伏見桃山にあり、古典に出てくる場所や地名には生徒の知識やなじみのある所が少なくない。国語科では、このような地の利を生かした古典の教材開発に取り組んでいる。一年では『方丈記』の京都での災害に関する叙述から、近年多発している自然災害との向き合い方を考える。三年では『万葉集』の山城地方で詠まれた歌を学び、地理や歴史の知識と合わせながら古人の思いに心を寄せる。

文学作品に迫る際は、時代や舞台などの背景を理解し、作者の経歴などと結び付けてイメージを膨らませることを大切にしている。特に古典は、今と比べたときに抱く共感やギャップから、生徒の思考が動きだす。このような「時代や舞台などの背景の理解」が古典学習の下地となるという考えと、「タイムトラベル」という言葉で生徒

を引き込みたいという思いから、「春はあけぼの」を教材として、表題の学習を設定した。

学習指導要領の「読むこと」で求められる「評価」や「批評」には、詳細な読解よりも、作品の魅力や指摘したい点などを俯瞰して捉えることが重要である。また、生徒が「深い学び」を得るには、問題解決学習が有効だ。そこで、「単元を貫く問い」を立て、一人一人が作品の価値判断や評価をし、納得できる解を導けるよう工夫した。

## 2 指導計画（全五時間）

### ■ 目標

- 「春はあけぼの」が書かれた時代や場所を考えながら読み、古典の世界に親しむ。
- 文章に表れている作者のものの見方や感じ方、表現について評価する。
- 他者の視点や疑問から学びを再構成し、

考えを広げたり深めたりする。

### ■ 展開

- 第一・二時 基礎学習（一斉）
  - ・作品や作者について知り、内容を理解する。
- 第三時 探究学習Ⅰ（グループ）
  - ・作品の気になった箇所から、「当時の風景」「当時の人々の様子」「作者の見方、感じ方」を考え、話し合う。
  - ・単元を貫く問いの解を出す。
- 第四時 探究学習Ⅱ
  - ・グループで話し合ったことや問いの解について、友達からアイデアや疑問を受け、考えを練り上げる。
- 第五時 振り返り
  - ・問いの解や学びを文章にまとめる。

## 3 指導の工夫・学習の実際

### ①「春はあけぼの」を分析する（第三時）

「平安時代の京都にタイムトラベル」という前提で、小グループで学習する。気になった箇所とそこから考えられる当時の風景や人々の様子、作者の見方・感じ方を表に整理した（ワークシートを配布）。以下、特に興味深かった記述を、注目した表現とともに紹介する。

「今と昔の違いが顕著に表れているところ。夜になると、今は電灯で明るく照らされるが、平安時代は都でも外は月の光くらいで月の出ていないときは真っ暗だった。↓だからこそわずかな蛍の光が目が留まり、美しさを感じる。便利になり、忘れていた感覚に気づかされる。」と、当時の夜の様子を想像し、思考を深めたプロセスが感じられる。

昼になりて……わろし  
「火桶の火も」に着目し、「『わろし』は昼になることを表していて、暖かくなるとみんなで火を囲んだりすることもなく、静かになって日常に戻るのが好ましくないと思っている。清少納言は特別感のある時間

が好きだった!?」と考察している。

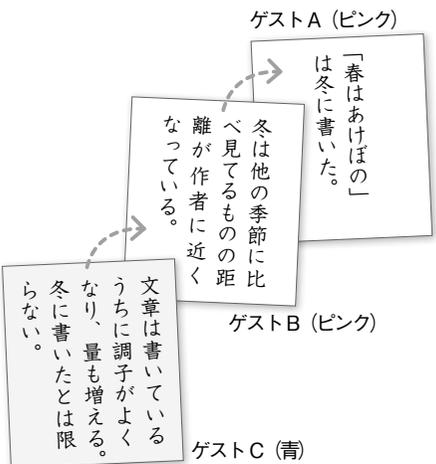
また、「あけぼの」「夜」「夕暮れ」「つとめて」はあるが、「昼」がないことに気づき、「昼は光が強くものがしっかりと映って風情がない。清少納言ははっきり見えるものではなく、ぼんやりした時間が好きだったのでは？『をかし』の文学ではなく、『ほかし』の文学！」と考えたグループもあった。

### ②新たな視点を交えて再考する（第四時）

グループで共有したことを発表し、考えを深めるために、「ワールド・カフェ」のスタイルを取り入れた。この手法は一度に話せる人数は限られるが、会話が滞ることなく、再考の材料となる付け足しや批判的な意見が自然に出る点が良い。まず、グループで前半に説明する人と後半に説明する人に分かれる。前半の人が説明している間、後半の人は、他のグループのテーブルをゲストとして回る。何回か回り、説明者を交代する。ゲストは三色の付箋を使って、「発見・気づき」（ピンク）、「疑問」（青）、「コメント」（黄色）を書く。この付箋を受け、説明者や次のゲストは新たな視点や考えるヒントをもらう。

例えば、あるカフェの発見「春↓夏↓秋↓冬と、文章の量が増えている」については、

左のように付箋が重ねられていった。



## 4 おわりに

「作者は、遠くのものや目に見えないものやかすかに見えるものなど、手の届かないものに憧れがあったのでは」と考えたグループがあった。清少納言は、華やかな宮中での出来事とは異なる静かな憧れを、生徒が指摘したような手の届かない美しいものに求めたのではないだろうか。

「春はあけぼの」は長年授業をしてきた教材だが、作品の価値判断や評価をするという今回の活動は好評だった。古典の世界をイメージし、テキストや友達との対話を通して学びを膨らませる生徒の姿に、今後の古典指導の可能性を感じた。